

SHOW-HIVEシネマール

★★★★★

レ・ミゼラブル Les Misérables デジタルリマスター/リミックス

2012、2023 年/イギリス映画

配給：東宝東和/125 分

2024 (令和7) 年 12 月 28 日鑑賞

テアトル梅田



2024-90

監督：トム・フーパー

作：アラン・ブーブリル&クロード
＝ミッシェル・シェーンベル
ク

出演：ヒュー・ジャックマン/ラッ
セル・クロウ/アン・ハサウ
エイ/アマンダ・セイフライ
ド/エディ・レッドメイン/
サマンサ・パークス/アーロ
ン・トヴェイト/サシャ・バ
ロン・コーエン/ヘレナ・ボ
ナム＝カーター

👁️👁️ みどころ

ロンドン発、トム・フーパー監督の傑作ミュージカル映画を、12年ぶりにデジタルリマスター/リミックス版で再鑑賞。小学生の時に読んだ『ああ無情』から65年を経た今、東宝や劇団四季のミュージカルとも対比しながら、その感動に心ワクワク！ある時は、涙いっぱい！

フランス革命は1789年だが、パン1個を盗んだ罪で19年もの刑に処せられたジャン・バルジャンが仮釈放されたのは、王政復古の時代だ。ジャベール警部から執拗に追われる彼が、市長への華麗なる転身を遂げることができたのは一体なぜ？そして、これにて彼の人生は完成型に？

いやいや、それでは私が読み上げた世界文学全集のトップに挙げる名作になるはずはない。ドストエフスキーの『罪と罰』とも対比すべき、本作の哲学性は？人生観、世界観は？そしてまた宗教観は？

本作のストーリーも興味深いが、ミュージカル版では、素晴らしい音楽にも酔いしれたい。本作では2人の中年男の生きざまがポイントだが、彼らが歌い上げる人生訓に富んだ歌曲にも、また学生達が歌い上げる“革命歌”にも注目！さらに前半ではファンテーヌの、中盤以降はエポニーヌとコゼットが歌い上げる悲しくも美しいバラードにも酔いしれたい。いいものは何度観てもいい。東京の帝国劇場の建て替えが完了する2030年には、長生きして再々度、本作を鑑賞したいものだ。

■□■12年ぶりの再鑑賞にワクワク！名作は何度でも！■□■

『キャッツ』や『オペラ座の怪人』と並ぶロンドン発の名作ミュージカルが、デジタル

リマスター／リミックス版で復活！私が同作をはじめて観たのは 2012 年 12／7 だから、再鑑賞は 12 年ぶり。その時に書いた評論（『シネマ 30』48 頁）は、別添の通りだ。東宝ミュージカルの舞台と劇団四季の舞台もそれぞれ鑑賞しているから、この名作ミュージカルのストーリーはもとより、美しいメロディーで綴られたヒット曲の数々や、本作を大いに盛り上げる“革命ソング”もそのほとんどが頭の中に入っている。

私がビクトル・ユゴーの小説『レ・ミゼラブル』をはじめて知ったのは、小学校 3、4 年生頃。当時は世界文学全集の 1 つとして、そして、タイトルも「レ・ミゼラブル」ではなく「ああ無情」として知ったが、パン 1 つを盗んだために過酷な刑に処せられたジャン・バルジャンの数奇な生き様に、子供心ながら心がざわめくとともに、その悲しい最期には子供心を大いに痛めたものだった。

そんな“下地”の上で、大人になってから観た東宝と劇団四季のミュージカルや 2012 年に観た本作では、1789 年のフランス革命後の「王政復古」の時代、庶民が苦しみにあえぐ中、再び「革命」の機運が盛り上がり、その中でジャン・バルジャンが、互いに一目惚れしたコゼットの恋人で革命闘争に参加する青年マリウスを助けるストーリーを改めて認識したものだった。また、このストーリーは、まさに大学時代の学生運動経験者として、とりわけ血湧き肉踊る感動的なストーリーだった。市民の武装蜂起を願った学生たちが築いたバリケードは無残にも崩壊し、多くの学生たちも死んでしまったが、ジャン・バルジャンに背負われ、地下道に逃げこんだマリウスのその後の運命は？

そんな、ロンドン発の名作ミュージカルが 12 年ぶりに復活したのだから、これは必見！

■□■キャストの妙はオーディションが原則！本作は？■□■

本作の 2 人の主人公を演じるのは、ジャン・バルジャン役のヒュー・ジャックマンとジャベール警部役のラッセル・クロウだが、私にはこの 2 人の配役はかなり意外だった。なぜなら、2 人とも演技力は折り紙つきだが、およそミュージカルスターとはかけ離れたアクション系、肉体系の俳優だと思っていた上、ミュージカル俳優としての歌唱力があるとは思っていなかったからだ。また、前半で大きな役割を果たす悲劇の女性ファンテーヌ役を演じたアン・ハサウェイも意外なキャストだった。東宝でも劇団四季でも『レ・ミゼラブル』の上演にあたっては、厳正なオーディションでキャストを決めてきたが、さてロンドンのミュージカル制作現場では、そしてまたトム・フーパー監督による本作では、そのキャストは如何にして実現したの？

今回そんな気持ちを強くしたのは、コゼット役を、本作後急速に人気女優に上り詰めていったアマンダ・セイフライドが演じていたことを再認識したためだ。私は 2012 年の本作鑑賞時の評論で、「コゼットもいいが、エポニーヌはもっと魅力的！」という小見出しで、エポニーヌの魅力を強調したが、それは東宝が『レ・ミゼラブル』を初演した 1987 年から 2011 年まで、1000 回以上もエポニーヌ役を演じた島田歌穂のイメージが強かったためだ。このようにミュージカルにおけるキャストの妙はオーディションが原則だが、本作

のキャスティングの妙は如何に？1812年の鑑賞時にはそれほど感じなかったキャスティングの妙を、12年後の再鑑賞たる今回は改めて確認することに！

■□■マリウスを巡るエポニーヌ VS コゼットの対決に注目！■□■

エポニーヌは強欲極まりない宿屋の主人テナルディエ（サシヤ・バロン・コーエンと、いかにも大阪のおばちゃん然とした（？）、その妻マダム・テナルディエ（ヘレナ・ボナム＝カーター）との間の一人娘。そして、この夫婦は、ファンテーヌが一人娘コゼットを預けていた時の預け先だ。もちろん、ファンテーヌはこの夫婦に費用を払っていたが、2人はコゼットを女中同様にこき使っていたから、少女時代は、お金持ちのお嬢様たるエポニーヌと召使いのようなコゼットとの身分の格差は歴然としていた。

しかし、復活した王政が腐り切り、革命気運が盛り上がる1832年当時のパリを舞台として共に生きているコゼットとエポニーヌは今、マリウスの愛を巡って、一方は幸せの絶頂に、他方は絶望のどん底にあった。なぜなら、マリウスの愛はコゼット一筋で、エポニーヌなど全く眼中になかったからだ。

もっとも、シャベール警部に追われるジャン・バルジャンは今、コゼットを連れて遠い旅に出る決心をしていたから、コゼットとマリウスとのお別れは必至。そんな中、コゼットの手紙を預かったエポニーヌの取るべき道は・・・？

本作では、マリウスをめぐるエポニーヌ VS コゼットの女同士の戦い（？）というサブストーリーも興味深いので、そのストーリーと、エポニーヌとコゼットの歌声にもしっかりと注目したい。

■□■ロンドンでの初演から40年！帝国劇場も建て替えに！■□■

私が本作を鑑賞した2024年12/28（土）の朝日新聞夕刊一面は、「帝劇ミュージカル『レ・ミゼ』と37年「数々のスター発掘 建て替え休館へ」の見出しで、「数々のミュージカルを上演してきた東京・日比谷の帝国劇場が来年2月、建て替えのため休館する」ことを報じた。そこに掲載された2枚の舞台の写真はレ・ミゼラブルの2つの場面だ。

また、同紙での『レ・ミゼラブル』の紹介は次のとおりされている。すなわち、

フランスの作家ビクトル・ユゴーの同名小説が原作。主人公ジャン・バルジャンら19世紀の動乱の時代を生きる人々の愛や希望を描く。1985年にロンドンで初演されたバージョンが世界各地で上演されている。日本では87年以来、今回の公演までに計3459回上演。

同記事は前記のとおりの、島田歌穂らの言葉で「帝劇ミュージカル」の思い出を語らせているが、そのラストを飾るのが『レ・ミゼラブル』ということには、なるほど、なるほど・・・。

ちなみに、劇場が入る帝劇ビルと隣の国際ビルは一棟の高層ビルに建て替えられ、帝劇は新ビルに移る計画、そして新ビルは2030年度に完成するそうだから、なんとか長生きし、新しい帝国劇場で再々度、『レ・ミゼラブル』を鑑賞したいものだ。

■□■『レ・ミゼラブル』VS『罪と罰』それぞれの人生観は？■□■

私は小学校 3、4 年生までの間に、学校の図書館にあった日本文学全集と世界文学全集、そして日本偉人伝と世界偉人伝をほぼ全て読み終えた。その中で強く印象に残っている物語や偉人伝はたくさんあるが、世界文学全集の中で最も強く印象に残っている物語が「レ・ミゼラブル（ああ無情）」だ。

他方、1974 年の弁護士登録から 50 年を経た 2024 年の今、弁護士としての私が強く興味を持ち続けている小説の主人公は、老婆の殺人を正当化しようとしたドストエフスキーの小説「罪と罰」の主人公ラスコーリニコフと、パン 1 コを盗んだため 19 年間に監獄に入れられた「レ・ミゼラブル」の主人公ジャン・バルジャンの 2 人だ。

将来性と才能のある、俺のような若者が貧乏なまま朽ち果てていくくらいなら、世の中の何の役にもたっていないあの金持ちの老婆を殺して金を奪っても、神はそれを許してくれるはずだ。ラスコーリニコフはそう考えて、確信犯として殺人行為に及んだが、そんな青年の結末は？他方、19 年の刑の後に仮釈放されたものの、そこで再び銀の食器を盗んでしまったジャン・バルジャンの人生観と、あくまでその逃亡先を追っていくジャベール警部の正義感の対比は？また、神についてのそれぞれの解釈の相違点は？

小学生の時には、なぜジャベール警部が自殺したのかについてあまり分かっていなかったと思うのだが、75 歳を迎えた今はジャベール警部の敗北感と、そのために自殺せざるを得なかった気持ちを理解することができる。他方、一時は、最愛のコゼットを若くてハンサムな恋人マリウスに奪われてしまうことに焦燥感や敗北感を覚えたジャン・バルジャンが、最後には全ての束縛から解放され、心安らかに神に召されていく姿も、75 歳になった今ではよく理解することができる。

ラスコーリニコフは結局「罪と罰」というタイトル通りの苦悩の中での生きざまを示したから、「レ・ミゼラブル」のジャン・バルジャンとは大違いだ。本作を 12 年ぶりに鑑賞した今回はそんなことをアレコレ考えたが、さてあなたのご意見は？

■□■ナポレオンは登場なし！時代状況を再度しっかりと！■□■

あなたは、コッポラ版の無声映画『ナポレオン』（81 年）知ってる？また近時のリドリー・スコット監督版の『ナポレオン』（23 年）（『シネマ 55』47 頁）を知ってる？

私は前者を、1982 年に大阪中之島のフェスティバルホールで上映された、生演奏付きのそして最後の 20 分間のクライマックスは「トリプル・エクラン」と命名された 3 面スクリーンの大迫力で鑑賞した。同作は当初 6 部作として企画されたが、資金不足のため、ナポレオンのイタリア征服までの第 1 部のみが映画化された。それに対して、リドリー・スコット版『ナポレオン』は、1789 年のフランス革命から、革命以降のナポレオンの急成長と皇帝就任までの絶頂期、そしてロシア遠征の失敗からの失脚と復権、そしてさらなる失脚という、ナポレオンの一生（半生）を描く超大作だった。

ナポレオンの皇帝としての戴冠式は 1804 年 12/2、また「ナポレオン法典」と呼ばれる

フランス民法典の公布も 1804 年、そしてアウステルリッツの戦いは 1805 年だ。また、ナポレオンによるロシア侵攻は、チャイコフスキーが作曲した交響詩「1812 年」のとおり、1812 年のことだ。そんなナポレオンに関する歴史は、本作には全く登場しない。それに代わって本作は、フランス革命から 26 年後の、王政復古していた 1815 年から始まる。ナポレオンによるフランスの第一帝政は 1804 年から 1814 年もしくは 1815 年、ワーテルロー戦いでの敗北は 1815 年だから、まさに本作は、ナポレオンの第一帝政が終わり、王政復興によってブルボン王朝が復活していた時期に、囚人から市長に見事に転身したジャン・バルジャンが登場する中で、本格的な物語が始まることになる。

私が 2012 年の本作鑑賞時に書いた別添の評論では、そのような視点から「時代状況の認識をしっかりと！その 1」「その 2」の小見出しで書いたが、その大切さは今回の鑑賞でも同じだ。1789 年のフランス革命とナポレオンの大活躍、そして王政復古と 1830 年の「七月革命」をしっかりと理解した上で、本作が描く「1832 年、パリ」における学生たちのバリエーション闘争をしっかりと理解したい。

2024（令和 6）年 12 月 30 日記



🎬🎬 みどころ

『キャッツ』や『オペラ座の怪人』と並ぶ、あの名作ミュージカルがスクリーンに！ジャン・バルジャンとジャベール警部との追跡劇をストーリーの軸としながら、革命に激動する1832年のパリで迎えるクライマックスはまさに感動的！囚人、市長、そしてコゼットの保護者という数奇な「3つの人生」を生き抜いたジャン・バルジャンの魂は、ファンタジーに導かれて今どこに？

名曲ぞろいの一曲一曲を骨太のストーリーの中でしっかり味わいながら、感動の涙に酔いしれたい。とりわけ、これが1000円で観られる60歳以上の人は、一度とは言わず、二度、三度と・・・。

■あのミュージカルがスクリーンに！名曲をタップリと！■

『レ・ミゼラブル』は『キャッツ』や『オペラ座の怪人』などと並ぶ私の大好きなミュージカルの一つで、何回も劇場で観劇したもの。1985年の初演以来、27年間にわたって世界各国での上演が続き、今なおロングラン記録を更新し続けている傑作中の傑作ミュージカルだ。そんなミュージカルがアカデミー賞作品賞の有力候補作としてスクリーンに登場！ジャン・バルジャンを演ずるのは『X-メン』(00年)のウルヴァリン役で一躍有名になったヒュー・ジャックマン。ジャベール警部にはラッセル・クロウ。そして小さなコゼットを残して死んでいく薄幸の女性ファンタジーには何とアン・ハサウェイが扮している。

『レ・ミゼラブル』の中で最初に歌はれる『囚人の歌』の重々しさ、革命色に染まる激動のパリの街中でアンジョルラス(アーロン・トヴェイト)やマリウス・ボンメルシー(エディ・レッドメイン)など革命を志す学生たちが歌う『民衆の歌』の気高さ、そして宿屋

の亭主テナルディエ（サシヤ・バロン・コーエン）とその妻マダム・テナルディエ（ヘレナ・ボナム＝カター）が歌うコミカルな『宿屋の主の歌』『裏切りのワルツ』等の楽しさ等は、一度聞いたら忘れられないものばかり。また、ファンテースが歌う『ラブリー・レディ』『夢やぶれて』、子供時代と立場が逆転したコゼット（アマンダ・セイフライド）が歌う『ブリュメ街』やエポニーヌ（サマンサ・バークス）がマリウスへの気持を歌う『オン・マイ・OWN』などもそれぞれ涙を誘う名曲ばかりだ。さらに本作全編を通じて「人間の生き方はいかにあるべきか？」を根柢的に問い続けるジャン・バルジャンは『独白』『フー・アム・アイ』『彼を帰して』などの心に残る名曲を歌い続けるし、ジャン・バルジャンと対決しながら自分の価値観の崩壊に耐えきれず最後にはセーヌ河に身を投げて自殺してしまうジャベール警部には、『星上』と『自殺』という対照的な曲がある。スクリーン上でそんな名曲をタップリと聴くことができる2時間38分はまさに「至福の時間」になるはずだ。

ちなみに、日本のミュージカルの舞台は日本語の歌詞だからわかりやすいといえれば確かにわかりやすいが、英語の歌詞には「本場もの」の良さがある。字幕を見ながら聴けば大体わかるレベルの英語が多いから、これを機会に英語の再勉強にも最適だ。

■時代状況の認識をしっかりと！その1■

本作は①1815年、ツールン、②1823年、モントルイユ・シュール・メール、③1832年、パリ、という3つの時代を生きるジャン・バルジャンと、それを追うジャベール警部の追跡劇を軸とした物語。ジャン・バルジャンのもともとの罪はパンを盗んだことだが、その後の脱走の罪なども含め計19年間も服役しなければならなかったというのが、1815年当時のフランスの「法律」の実態だ。また、せっかく手に入れた「仮釈放」も名ばかりで、身分証の代わりに「釈放状」を提出しても全く仕事にありつけない状況下では、ジャン・バルジャンが自由に生きる術がないのも当然だ。

もともと、そうかといって、一夜の宿を提供してくれた司教（コルム・ウィルキンソン）の好意を裏切って銀の食器を盗み出したジャン・バルジャンを見ると、弁護士のみならず「こりゃ弁解の余地なし」と思うてしまうが、そこで示した司教の対応とは？ここらは世界文学全集の『レ・ミゼラブル（ああ、無情）』を読んでいる人にはおなじみのストーリーだが、そこで更生を誓ったジャン・バルジャンの、その後の人生とは？そんなテーマを考えるにふさわしい。そんな時代状況の認識をしっかりと。

■「小事」にこだわらず、骨太のストーリーに注目！■

それから8年後の1823年、ジャン・バルジャンはモントルイユ・シュール・メールでマドレーヌと名を変えて、市長にまで上りつめていたから立派なものだ。まさに犯罪者だって気持ちえしっかり持てば更生できることの典型だが、そこにジャベール警部が赴任してきたからヤバイ。そして、ジャベール警部の口から追い求めているジャン・バルジャンが逮捕された、と聞かされると・・・。

他方、ジャン・バルジャンは市長の傍ら工場経営の実業者としても大成功していたが、

彼の工場で問題を起こし、解雇されてしまった女性がファンデーヌ。工場の中で彼女に救いの手をさしのべることでできなかったジャン・バルジャンは、婚姻にまで身を落とし、一人娘コゼットの身を案じながら死んでいこうとするファンデーヌを見て、コゼットの身を守ると約束。しかし、自分こそがジャン・バルジャンだとわざわざ裁判所まで出向いて明らかにしたジャン・バルジャンは、再びジャベール警部から追われる立場になったから、果たしてそんなことができるのか？結局ジャン・バルジャンは、「コゼットを救い出すから3日間だけ猶予をくれ」とジャベール警部に懇願しておきながら、再度それを破ってコゼットの保護者として生きる「第3の人生」を歩み始めたわけだが、さてそんなジャン・バルジャンに対するジャベール警部の執拗な追跡は？

なぜ釈放状を破り捨てたジャン・バルジャンがモントルイユ・シュール・メールで第2の人生を歩み、実業家として成功し、市長にまで上りつめることができたのか？なぜジャン・バルジャンが1832年のパリに現われるまで、コゼットの保護者としてタブリの資金を持って逃亡の旅を続けることができたのか？それは本作を観ていても必ずしも明らかではないが、そんな「小事」(?)にこだわっているのは「大事」が見えなくなってくる。したがって、本作を鑑賞するについてはそんな「小事」を捨て、骨太のストーリーに注目することが大切だ。

■時代状況の認識をしっかりと！その2■

フランス革命が勃発したのは1789年。これは实际歌劇の『ベルサイユのばら』でも有名だが、本作で「革命！革命！」と学生たちが高揚しているのは、1832年のパリ。1789年のフランス革命の後フランスは、①共和制の樹立（1791年）、②ギロチンによるルイ16世とマリー・アントワネットの処刑（1793年1月、10月）、③ロベスピエール主導によるジャコフ党の独裁、④テルミドールの反動（クーデター）（1794年7月）、⑤ブリュメールのクーデターによるナポレオン・ボナパルトの新政府樹立（1799年）と激動の時代が続いた。さらに、ベートーベンの交響曲第3番『英雄』でよく知られているように、フランス革命後の混乱を収拾して軍事独裁政権を樹立したナポレオンは、その卓抜した軍事的才能と政略的才能を発揮して、一時ヨーロッパの大半を支配下に置き、「ナポレオン1世」としてフランス皇帝の地位に就いた（「フランス第一帝政」1804年～1814年もしくは1815年）。しかし、「ワーテルローの戦い」の敗北によってセントヘレナ島に流され、1821年に死亡した。その結果、1814年にブルボン王朝が復活することになった（王政復古）。

ナポレオン失脚後は、ヨーロッパをどのように統治するかについて、各国が集まる「ウィーン会議」の中で話し合われたが、「会議は踊る、されど進まず」という有名な言葉どおり、各国の利害が対立する中その進展はなかった。王政復古によってブルボン王朝が復活したものの、ルイ18世とその後を継いだ弟のシャルル10世は反動的な政治を行ったため、1830年のラファイエット將軍を指導者とする「七月革命」によってシャルル10世は退位し、フランスは「国民王」ルイ・フィリップを国王、ラファイエットを首相とする新たな立憲君主制に移行した。ドラクロワが描く『民衆を導く自由の女神』の有名な絵

は、まさにこの「七月革命」のイメージを描いたものだ。ルイ・フィリップは当時の市民（ブルジョワジー）をよく代表していたが、革命の主力であったプロレタリアートがないがしろにされたため次第にその不満が蓄積し、その後の「革命」は労働者や農民の「階級闘争」へと様変わりしていくことになった。本作が描く「1832年、パリ」における学生たちの革命への高揚は、まさにそんな時代なのだ。

日本でも1853年のペリー来航の後、1868年に明治政府が成立するまで、15年間も激動の時代が続いた。さらに明治維新成立後も、1877年の「西南の役」など新政府のあり方をめぐるゴタゴタが続いたが、フランスも日本と同じようなものだったわけだ。

こういう歴史にどこまで興味を持つかはあなた次第だが、少なくとも本作に見る学生たちが目指した革命には、フランス革命のそれとは違うことはしっかり認識する必要がある。もともと『レ・ミゼラブル』でこの革命のストーリーを登場させるのはあくまでジャン・バルジャンの生き方と、互いに一目惚れしてしまったコゼットとマリウスとの恋の行方を浮かびあがらせるための「道具」だから、それを踏まえうえて、あの時代状況の認識をしっかりと！

■コゼットもいいが、エポニーヌはもっと魅力的！■

舞台の上で直接観客を前にして演じるミュージカルでは、ダブルキャスト、トリプルキャスト、つまり一人の役を2人、3人の役者が交代で演じることが多い。しかし『レ・ミゼラブル』では、対照的な人物であるジャン・バルジャンとジャベール警部、さらには同じ年頃のコゼットとエポニーヌを複数の役者が交代で演じることがあるから、それはそれで新鮮だった。

本作はジャン・バルジャンとジャベール警部の追跡劇であると同時に、2人の対照的な人生観の激突だが、コゼットとエポニーヌの場合は激動の時代の中で翻弄され、いつの間にか立場が逆転してしまうだけでなく、マリウスとの恋については「勝ち組」と「負け組」に分かれてしまうのが印象的。もちろん客観的に見れば、ジャン・バルジャンという保護者の登場によって、各地を転々としながらも父親（？）の愛情いっぱい育てられ、かつ一目惚れしたマリウスとの恋を成就することができたコゼットのほうが幸せ者だが、私の目には、コゼットの生き方はあくまで受身的。それに対してテナルディエとマダム・テナルディエという何ともケツタイな両親を持つエポニーヌは、小さいときは圧倒的なお嬢様だったものの、激動の時代の中で両親もかつてのボロ儲けの道を閉ざされ、エポニーヌもたくましく生きていかなければならなくなったから大変。そのうえ、大好きなマリウスは自分の方を振り向いてくれない、約10年振りに再会したコゼットにゾッコンだから、こりゃたまったものではない。当然嫉心は千々に乱れたはずだから、そんな中でエポニーヌが心の底から歌い上げる曲は名曲ぞろいだ。

他方、ジャン・バルジャンがパリからの脱出を決めたため、急な荷造りの中、コゼットがマリウスに宛てた手紙を見つけたエポニーヌは一度は嫉妬心からそれを隠し、「コゼットは行ってしまった」とマリウスに伝えたのは仕方ない。しかし、パリゲートの中でマリウスをさがさうとして敵の銃弾に撃たれたエポニーヌはマリウスに抱かれたがら静かに息を

引き取ったが、その時コゼットの手紙をマリウスに渡したのは立派なものだ。そんなこんなで激しい娘心の移り変わりを考えながらエポニーヌの歌うバラードの名曲をしみじみ聴いていると、コゼットもいやが、エポニーヌはもっと魅力的！

■ 若者たちの、革命への熱い想いに涙！ ■

中国（中華人民共和国）の国歌は『義勇軍行進曲』だが、これは抗日戦争中に人民の間で広く歌われたもので、文化大革命終結直後の1978年3月に正式に国歌とされたものだ。それに対してフランスの国歌『ラ・マルセイーズ』は、1795年7月14日に一度は国民公会で国歌として採用されたものの、1804年にナポレオンが皇帝になると、第一帝政から王政復古にかけては公の場で歌うことは禁止された。しかし、1830年の七月革命以降解禁となり、第三共和制下で再び国歌とされた。そして第四共和制の「1946年憲法」でも、第五共和制の「1958年憲法」でも『ラ・マルセイーズ』は国歌として定められた。

他方、私は1982年にアベル・ガンス監督の無声映画『ナポレオン』（26年）にフランシス・フォード・コッポラ監督がフル・オーケストラの伴奏をつけて上映したものを大阪フェスティバル・ホールで鑑賞し大感激したが、そこではフランス国歌『ラ・マルセイーズ』とその変奏曲が何度も何度も効果的に使われていた。このように中国でもフランスでも、時代が激動する中で、広く国民の間で歌われていた曲が国歌とされているから、その国歌には国民の想いがこめられているわけだ。

もともと貴族のお坊ちゃんながら革命に浮かしているマリウスは、ある意味で私たち団塊世代が大衆して参加した1960年代後半の学生運動と似たような感覚だが、革命を目指す学生たちのリーダーであるアンジョルラスは筋金入り！市街戦にはバリケードが不可欠だが、アンジョルラスの号令一下、学生たちが築くバリケードの固さとは？また、それに対する市民たちの協力は？1969年の東大安田講堂での攻防戦は導入された機銃隊の前にあっけなく全共闘系学生たちの敗北に終わったが、さてアンジョルラスたちの戦いは？『ABCカフェ』『民衆の歌』『共に飲もう』等の曲を学生たちと共に心の中で口ずさ



「レ・ミゼラブル ブルーレイ（デジタル・コピー付）」
6月21日発売 ¥3,800（税込）
発売元・販売元：ジェネオン・ユニバーサル・エンター
テイメント
Film (c) 2012 Universal Studios. ALL RIGHTS RESERVED

みながらスクリーンを見ていると、一方で大いに気分が高揚するが、その悲しい結末に思わず涙が・・・。

■ファンテースに涙！ジャン・バルジャンに涙！そして■

「1832年、パリ」における学生たちの戦いは、結局市民たちの協力を得ることができなかった。そんな中ただ一人ジャン・バルジャンの手によって生き延びることができたマリウスは、コゼットとの結婚という幸せをつかむことになる。フランスはその後、共和主義者、社会主義者たちによる1848年の「二月革命」によって、ルイ・フィリップ王の立憲君主制を終わらせ、第二共和制が成立するわけだが、さてその時マリウスは貴族の立場？それとも民衆の立場？それは一つの興味だが、本作では「革命」への興味はそれくらいにしたい。そして、①囚人としての19年間の生活、②モントルイユ・シュール・メールの市長としての生活、③コゼットの保護者としての流浪の旅の生活、という数奇な3つの人生を歩んできたジャン・バルジャンの最期をしっかりと確認したい。

ジャン・バルジャンはコゼットには過去の秘密をまったく語らず、コゼットを託すマリウスだけに秘密を打ち明けた。そして、行き先も告げないままパリを出ていったが、これを見れば彼は自分の寿命が尽きようとしていることは十分に自覚していたはず。したがって、本来ならば一人孤独の中で死んでいくところだが、それでは感動的なフィナーレには



『レ・ミゼラブル ブルーレイ（デジタル・コピー付）』

6月21日発売 ¥3,800（税込）

発売元・販売元：ジェネオン・ユニバーサル・エンターテイメント

Film (c) 2012 Universal Studios. ALL RIGHTS RESERVED

ならない。そこで再び登場するのが、既に天国に召されていたファンテースだ。さらに、結婚式へ乱入してきたデナルディエとマダム・デナルディエの口からやっとジャン・バルジャンの居場所を聞きだすことができたマリウスも、コゼットと共にジャン・バルジャンのもとへ。ジャン・バルジャンはこんな恵まれた状況で最期を迎えることができるとはまったく考えていなかったはずだ。さあ、ここでジャン・バルジャンからコゼットに渡された一通の手紙には、一体ナニが書かれていたのだろうか？

そんな感動的な展開の中で、4人が歌いあげる『エピソード』の曲を聴くと、ファンテースに涙！そしてジャン・バルジャンに涙！さらに、本作の最後に歌われるのは『民衆の歌ーリブライズ』。ミュージカルならではの演出の中、この曲を聴きながらすべての観客は魂の声に感動し、明日への生きる勇気を奮い起こすことができるはずだ。

2012（平成24）年12月10日記